

夏

イーデイス・ウォートン
水野尚之 訳

第二章

ハチャード記念図書館の司書の勤務時間は三時から五時までだった。そしてチャリティーは義務感からたいてい四時半近くまで机に向かっていた。

しかし彼女は、それによってノース・ドーマーにも彼女自身にも何か実際的な利益が生じると思ったことはなかった。そして彼女は、気分次第で、図書館がもう一時間早く閉まると決めるのに何のためらいもなかった。ハーニー氏が出て行って数分後に彼女はこの決定をして、編み物を片付け、雨戸を閉め、知識の宝庫の扉の鍵を回した。

彼女が出てきた通りには依然として人影がなかった。彼女は通りを見回し、自分の家の方へ歩き始めた。しかし彼女は、家に入るでもなく通り過ぎ、野道を通って丘の斜面の牧草地へと上っていった。彼女は門のかんぬきを下ろし、牧草地の崩れた塀に沿った小道を歩いて、カラマツの木立が新しい房を風になびかせている丘のここ

ろまで歩いていった。そこで斜面に横になり、帽子を投げ捨て、草に顔を隠した。

彼女は多くのことに無知で無感覚であり、ほんやりとそれが分かっていた。しかし光と空気、香りと色彩をもつものすべてに対しては、彼女の血のすべてが反応した。手の平の下の乾いた山の草の荒々しき、顔を埋めた麝香草の香り、彼女の髪を撫で綿のブラウスに吹き込む風、そしてカラマツが風になびく音を愛したのだ。

風を感じ、頬を草にこするのがただ好きだったために、彼女はしばしば丘を上り、ひとり横になった。そのような時には大抵、彼女は何も考えず、ほんやりとした幸福感に浸って横たわっていた。今日の彼女の幸福感は、図書館から抜け出してきた喜びによって強まった。勤務中に立ち寄ってくれた友達と話をするのはそれなりに好きだったが、本のことで煩わされるのは嫌だった。めったに借りられないのに、その本がどこにあるかなんて、どうして彼女が覚えていられるのだろうか？ オーマ・フライは時たま小説を借り出し、弟のベンは彼が言うところの「地理」と、商業と簿記の本が好きだった。しかし時折『アンクル・トムの小屋』や『栗のイガを開いて』^①やロングフェローを借りる以外、他の誰も何の本も借りなかった。彼女はこれらの本を近くに置いておき、暗闇でも探せるほどだった。しかしごく稀に予期せぬ本を希望される時があり、彼女はそれを不正のように感じて苛立った。……

彼女はその若い男の容貌や近視の目つき、そして唐突であるが柔らかな奇妙な話し方が好きだった。ちょうど彼の手が日焼けして筋張っていないながらも、女性のような滑らかな爪がついているのも好きだったように。彼の髪も日焼けしていた、あるいは霜の後のシダのような褐色と言った方がよかった。目は灰色で、近視の人にある魅力的な目つきをしていた。彼の微笑は恥ずかし気だったが、まるで自分は彼女が夢にも思わなかったたくさんのことを知っているが、その優位性を彼女に感じさせようなどとは絶対に思っていないかのような自信に満ちてい

た。しかし彼女は彼の優位性を感じ、その感覚が好きだった。それが新鮮だったから。彼女は貧しく無知であり、自分がそうであることを分かっていた。山から来たことが最悪の恥辱であるようなノース・ドーマーでは、卑しい者たちの中でもっとも卑しい存在だった。しかし彼女の狭い世界では、彼女はいつも支配者だった。もちろんそれは、ロイアル弁護士が「ノース・ドーマーで最も有力な人物」であるという事実のせいでもあった。実際彼はこの町には大きすぎたために、事情を知らない部外者たちは、彼がなぜノース・ドーマーに留まっているのかいつも疑問に思っていた。ともあれ、そしてミス・ハチャードがどう思おうと、ロイアル弁護士はノース・ドーマーを支配しており、チャリティーはロイアル弁護士の家を支配していたのだ。彼女はこれまでそのような表現で自分に言ったことはなかったが、自分の力を知っており、その力がどこから来るのかも分かっている、その力を憎んでいた。今図書館にいる若い男は、人に依存することの甘美さがどのようなかを、彼女に初めて感じさせ、混乱させた。

彼女は草の上に座り、髪についた草を払い、自分が支配する家を見下ろした。その家は眼下に活気なく放っておかれていた。色褪せた赤い正面は「庭」によって道路から分けられていた。その「庭」には、グーズベリーの茂みが縁取る小道や、牡丹づるに覆われた石造りの井戸、そしてロイアル弁護士が彼女を喜ばそうとヘップバーンから持ってきた扇型の添え木に支えられた弱々しいクリムゾン・ランブラー種のバラが植えられていた。家の裏手にはでこぼこした土手があり、そこには物干し綱が張られて乾いた壁まで伸びていた。そして壁の向こうにはトウモロコシの畑と二、三列のジャガイモ畑が、隣接した岩とシダの荒れ地へと雑然とつながっていた。

チャリティーはその家を初めて見た時のことを思い出せなかった。山から連れてこられた時には熱を出していた、と言われた。彼女が思い出せるのは、ロイアル夫人のベッドの足元の子供用ベッドで目を覚まし、のちに自

分の物になる部屋が冷たく整理されているのに気づいた、ということだけだった。

ロイアル夫人はその七、八年後に死んだ。そのころには、彼女は自分のまわりのほとんどのことについて理解していた。彼女はロイアル夫人が悲しげで臆病で弱いことを知っていた。ロイアル弁護士ががさつで暴力的で、夫人よりもいっそう弱いことも知っていた。彼女は（村の向こうの端にある白い教会で）自分がチャリティーと名付けられたのは、「彼女を山から連れてきた」ロイアル弁護士の清廉さを称賛するためであり、彼に依存しているという事実にはふさわしい感覚を彼女の中に保たせるためであることを知っていた。彼女はロイアル弁護士が自分の保護者であることを知っていたが、皆が彼女をチャリティー・ロイアルと呼ぶとはいえ、彼が法律に則って彼女を養女にしたわけではないことを知っていた。また彼女は、彼が弁護士としての仕事を始めたネトルトンで開業しないで、なぜノース・ドーマーに戻って住むようになったのかも知っていた。

ロイアル夫人が死んだあと、チャリティーを寄宿学校に送る話が出た。言い出したのはミス・ハチャードであり、ロイアル氏と長い間話し合った。ロイアル氏はある日、彼女の計画を実行するために、彼女が勧める施設を訪問しにスタークフィールド^③に出かけて行った。彼は翌日の夜、暗い顔をして戻ってきた。これまでに見た彼のどの表情よりも暗い、とチャリティーは思った。そのころには彼女なりにいくらか経験を積んでいた。

いつ寄宿学校へ行くのかと彼女が聞くと、彼は「お前は行かない」と素っ気なく答え、事務所と呼んでいる部屋に引きこもった。翌日、スタークフィールドでその学校を経営している女性から、「事情により」現在は生徒をもう一人受け入れる余裕はないとの手紙が来た。

チャリティーはがっかりしたが、理解した。ロイアル氏が白紙にしたのはスタークフィールドの魅力ではなかった。彼女を失うと考えることだった。彼は恐ろしく「孤独」な男だった。自分もこれほど「孤独」だったか

ら、彼女にはそれが分った。彼と彼女は、この悲しい家で向かい合つて、孤独の深さを測つてきたのだ。彼に対して特別な愛情も、ほんのわずかな感謝の気持ちも感じなかつたとはいへ、彼女は彼を憐れんだ。彼がまわりの人たちより優位に立つており、彼女が彼と孤独との間の唯一の存在だと意識していたから。それゆへ、ミス・ハチャードが一、二日後に彼女を呼んでネトルトンの学校について話し、今度は自分の友人が「必要な手はずを整える」と語つた時、チャリティーは彼女の話の遮つて、自分はノース・ドーマーを離れないことにした、と言つた。

ミス・ハチャードは優しく彼女を諭したが、無駄だつた。チャリティーはただ「ロイアルさんが寂しがると思う」と繰り返した。

ミス・ハチャードは困惑して眼鏡の奥で目をまばたかせた。彼女の長く弱々しい顔は当惑の皺にあふれた。彼女は、マホガニーの肘掛け椅子の腕に両手を乗せ、言わねばならないことはぜひとでも言いたいと明らかに思つている様子で体を前にかがめた。

「その気持ちは立派だけど」

彼女は居間の薄暗い壁を見回し、先祖の銀板写真や教訓を書いた刺繍見本に助けを求めたが、それを見えます話し辛くなつたようだつた。

「実は、良い面のためばかりじゃあ——そのためばかりじゃあないのよ。他の理由もいろいろあるの。あなたは幼すぎて分からないけど……」

「いえ、幼くありません」チャリティーは厳しく言つた。ミス・ハチャードは金色の帽子の根元まで顔を赤らめた。しかし彼女は説明を遮られて漠然とした安堵を感じたにちがひなかつた。また銀板写真に助けを求めなが

ら、ミス・ハチャードは「もちろん私はあなたのためにいつでもできることはするつもりよ。万一の場合……ひよっとしての時は……いつだって私のところへ来られることは分かっているでしょう……」、と話を結んだのだ。

この訪問からチャリティーが戻った時、ロイアル弁護士は玄関で彼女を待っていた。髭を剃り、黒の上着にブラシをかけ、立派な男の記念碑のように見えた。このような時、彼女は心から彼を称賛した。

「やあ」彼は言った。「話をついたのかい？」

「はい、話はずきました。私は行きません」

「ネトルトンの学校へ行かないと？」

「どこにも行きません」

彼は咳払いをして、厳しい声で尋ねた。「どうして？」

「行きたくないのです」と彼女は言い、彼の横を過ぎて自分の部屋に向かった。彼が彼女にヘップバーンでクリムゾン・ランプラー種のバラと扇型の添え木を買ってきたのはその翌週だった。彼がそれまで彼女に何かをプレゼントしたことはなかった。

その二年後、十七の時、彼女の人生で次の大きな出来事が起きた。ネトルトンへ行くのを嫌うロイアル弁護士は、ある訴訟事件で呼ばれた。ノース・ドーマーや周辺の村では訴訟がほとんどないとはいえ、彼は依然として弁護士を続けていた。一度などは、断る余裕がないほどの機会だった。彼はネトルトンに三日滞在し、訴訟に勝ち、上機嫌で戻ってきた。彼には稀な気分で、旧友たちが「嵐のように歓迎してくれた」と夕食の場で堂々と話したところにその機嫌は現れていた。彼は内緒事のようにこう話を結んだ。「ネトルトンを離れるなんてまった

く馬鹿だった。そうさせたのはロイアル夫人だった」

何か辛いことが起きて、彼はその思い出を紛らそうとしている、とチャリティーはすぐ察した。彼女は早めに寝室に上がり、彼が擦り切れた油布の夕食のテーブルに両肘をついたまま物思いに沈んでいるままにしておいた。階段を上る時に彼女は、ウイスキーの瓶を入れてある食器棚の鍵を彼の上着のポケットから取り出しておいた。彼女はドアがガチャガチャ鳴る音で目覚め、ベッドから飛び起きた。ロイアル氏の低く有無を言わせない声を聞いて、何か事故でもあったのかと心配してドアを開けた。彼女には他のことなど思いつかなかった。しかし戸口で彼を見て、平静さを失ったその顔に秋の月の光が差しているのを見た時、彼女は理解した。

一瞬、二人は黙ってお互いを見た。そして彼が足を戸口に差し入れた時、彼女は腕を伸ばして彼を押しとどめた。

「ここからすぐに出て行って」彼女は自分でも驚くような甲高い声で言った。「今晚は鍵を渡しません」

「チャリティー、中へ入れてくれ。鍵が欲しいんじゃない。私は孤独な男なんだ」彼は彼女の心を時折動かした深い声で言い始めた。

彼女の心はショックで沈んだが、軽蔑して彼を押し戻し続けた。「じゃあ、あなたは間違われた。ここはもうあなたの妻の部屋ではありません」

彼女は怖いとは思わなかった。ただ深い嫌悪を感じただけだった。そしておそらく彼もそれを察したか、彼女の顔にそれを読み取ったのだろう。一瞬彼女をじっと見つめ、彼は引き下がり、ゆっくりとドアに背を向けた。鍵穴に耳を当てて、彼女は彼が暗い階段を手探りで降りていき、台所へ向かった音を聞いた。彼女は食器棚の羽目板が割れる音がするのでは思っていたが、その代わりにしばらくして彼が家のドアの鍵を開ける音が聞こえた。

彼が通りを歩き去る時、その重い足音が沈黙を通して彼女に聞こえてきた。彼女は窓までそっと歩き、彼の曲がった姿が月夜の道路を歩いていくのを見た。その時、勝利の意識とともに恐怖の感覚が今ごろになって彼女を襲い、彼女は骨まで寒さを感じてベッドにもぐりこんだ。

その一、二日後、ハチャード図書館の管理人を二十年してきたユードラ・スケフが突然肺炎で死んだ。そして葬儀の翌日、チャリティーはミス・ハチャードに会いに行き、図書館員をさせてほしいと頼んだ。この要求はミス・ハチャードを驚かせたようだった。彼女は明らかにこの新しい候補者の資格を疑問視していた。

「まあ、よく分からないけど。あなたは若すぎない？」彼女はためらった。

「お金を稼ぎたいんです」チャリティーはこう答えただけだった。

「ロイアルさんはあなたが欲しいものは何でもくださるのではないの？ ノース・ドーマーではお金持ちの人はいませんよ」

「ここから出ていくお金を稼ぎたいのです」

「出ていくですって？」ミス・ハチャードの当惑した皺が深まり、嘆きに満ちた沈黙が続いた。「ロイアルさんから離れたいの？」

「そうです。そうでなければ家にもう一人女の人がいてほしいんです」チャリティーはきっぱりと言った。

ミス・ハチャードは椅子の肘掛けのあたりで神経質そうに手を握りしめた。彼女の目は壁の色褪せた様々な顔に助けを求めた。そして決心がつかずにかすかな咳をしたあとで言ってみた。「家の…家の仕事があなたには大変すぎるのかしら？」

チャリティーの心は冷えた。ミス・ハチャードには彼女を助ける術がなく、彼女はひとりで戦ってこの困難から抜け出さねばならないだろう、と理解した。孤立感がさらに強まった。彼女は自分が途方もなく老いているように感じた。「この人には赤ん坊のように話さなければならぬ」と思い、ミス・ハチャードが長く未熟であったことに同情を感じた。「そう、そうなんです」彼女は声を出した。「家の仕事は私には大変なんです。この秋はずっとひどい咳が続いていました」

こう言うと、ただちに効果があつたのが分かった。ミス・ハチャードは、哀れなユードラが死んでいった様子を思い出して青ざめ、自分にできることはするという約束をした。しかしもちろん、牧師さんやノース・ドーマーの行政委員やスプリングフィールドのハチャードの遠い親戚など、相談せねばならない人たちがいる。「あなたが学校にさえ行ってってくれたら！」彼女はため息をついた。彼女はチャリティーについてドアまで来て、戸口の安全さを意識して、ちらと責任を逃れるように言った。「ロイアルさんは時々人を疲れさせることは知っています。でも彼の奥さんは彼に耐えました。そしてチャリティー、お前を山から連れてきたのはロイアルさんだということをお前はいつも忘れてはいけませんよ」

チャリティーは帰宅し、ロイアル氏の「事務所」のドアを開けた。彼はストーブのそばでダニエル・ウェブスター^⑤の演説集を読んでいた。彼が彼女のドアに来て以来経過した五日間、彼らは食事で顔を合わせていた。そして彼女はユードラの葬儀では彼の横を歩いた。しかし二人は一言も言葉を交わしていなかった。

彼女が入ってきた時、彼は驚いて目を上げた。彼は髭を剃っておらず、ひどく老いたように見えるのに彼女は気づいた。しかし彼女は彼をいつも老人と思ってきたので、彼の外観の変化が彼女の心を動かすことはなかった。ミス・ハチャードに会いに行ってきたことと何のために行ったかを、彼女は彼に告げた。彼が驚いたことが彼女

には分かった。しかし彼は何も言わなかった。

「家事が私にはきつすぎるとミス・ハチャードに言いました。また家政婦の娘を雇うお金を稼ぎたいとも言いました。でも私は家政婦代を払うつもりはありません。あなたが払わなければなりません。私は自分のお金がほしいのです」

ロイアル氏の密生した黒い眉毛は、しかめつらで引き寄せられた。そして彼は座ったまま、インクで汚れた爪で机の端を叩きはじめた。

「何のためにお金を稼ぎたいんだ？」彼は尋ねた。

「行きたいときに出ていくためです」

「どうして出ていきたいんだ？」

彼女の軽蔑がほとばしり出た。「そうせずに済むならノース・ドーマーに留まりたいと願う人がいるとお思いになる？ あなただつて留まらないだろう、とみんな言っていますよ！」

顔を低くして彼は尋ねた。「どこへいくつもりだ？」

「自分の生活費を稼げるところならどこでも。はじめにここで試してみます。ここではうまくいかないなら、どこか他へ行きます。必要なら山へだつて登ります」彼女はこう脅して、話をやめた。効果があつたことが分かった。「ミス・ハチャードや行政委員たちを説得して私が図書館で働けるようにしてほしいんです。それにこの家に女の人がいてほしいんです」と彼女は繰り返した。

ロイアル氏の顔はひどく青ざめた。彼女が話し終えた時、彼は思案げに立ち上がり、机に寄りかかった。一、二秒、彼らはお互いを見た。

「ちよつと」言葉を発するのがむずかしいかのように彼はとうとう言った。「お前に言いたかったことがあるんだ。もつと前に言うべきだった。私と結婚してほしい」

娘は身じろぎもせず彼を見続けた。「私と結婚してほしい」彼は咳払いをして繰り返した。「次の日曜に牧師がここに来る。その時に手筈を整えられる。ヘップバーンの判事のところへ君を連れて行って、そこで手続きをしてもいい。君の希望通りにしよう」彼の目は、彼女が自分に向け続ける容赦ない視線を受けて下を向き、彼は片方の足からもう片方へと落ち着きなく体重を移した。不格好にみすばらしく取り乱して彼女の前に立った時、紫の血管は机に押しつけた彼の両手を歪ませ、長い雄弁家の顎は告白の努力に震え、彼は彼女が常に見てきた父親のような老人の醜い戯画のように見えた。

「あなたと結婚するですって？ 私が？」彼女は侮蔑的な笑いで吹きだした。「この前の夜に私に頼みに来たのはそれだったの？ 一体どうなさったの？ 最後に鏡で自分の姿をご覧になったのはいつなのかしら？」自分の若さと強さを傲慢にも意識して、彼女は身体をまっすぐに伸ばした。「娘を雇っておくより私と結婚した方が安くつくだろうとお考えのようね。あなたがイーグル郡で一番ケチな人だということはみんな知っているわ。でもそんな風に二度も繕いものをしてもらおうとは思っておられないようね」

彼女が話している間、ロイアル氏は身動きしなかった。彼の顔は灰色になり、あたかも彼女の軽蔑の炎が彼の眼を見えなくさせたかのように、黒い眉は震えた。彼女が話し終わった時、彼は手を挙げた。

「もう十分だ。だいたい分かった」彼は言った。彼はドアの方に向かい、帽子掛けから帽子を取った。戸口で立ち止まった。「人々は私を正当に扱ってこなかった。はじめから私に正当ではなかった」と彼は言い、外へ出て行った。

数日後、チャリティーが月八ドルの給料でハチャード記念図書館の司書に任じられたこと、およびクレストン養老院から老女ベリーナ・マーシユがロイアル弁護士宅に住みに来て料理をすることになったことを、ノース・ドーマーは驚きをもって知った。

(註)

- ① 『中村栗のイガを開いて』——“Opening of a Chestnut Burr.” 一八七四年出版の Edward Payson Roe 作“Opening a Chestnut Burr.”の間違い。キリスト教精神のもとに書かれた大衆感傷小説。
- ② クリムゾン・ランブラー種のバラ——Crimson Rambler: 蔓(つる)バラの一種で赤い八重の花をつける。
- ③ スタークフィールド——Starkfield. 「イーサン・フロム」(“Ethan Frome”)でも言及されるマサチューセッツ州の架空の都市。
- ④ 行政委員——selectmen. Rhode Island 州を除く米国 New England 各州の town で選出された任期三年の都市行政委員。理事会を構成し、town 行政を執行する。
- ⑤ ダニエル・ウェブスター——Daniel Webster: 一七八二—一八五二。米国の政治家、雄弁家。國務長官(一八五〇—五二)